SML理論による

音楽教育とハイテク

その114

Music Education and High-technology

鈴木　寛（兵庫教育大学教授）

Ｍの教育（7）

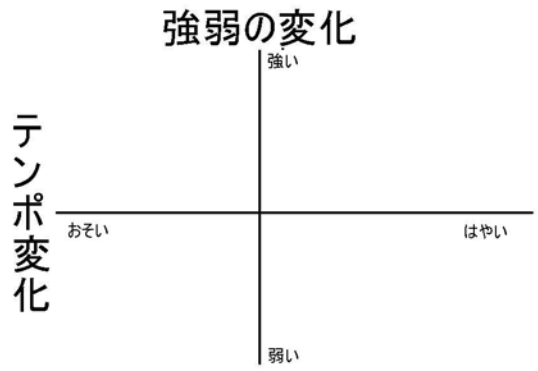
台本と台詞（2　）

楽譜は多くの演奏家にとって「台本」の役割があります。その台本を書く「脚本家」に当たるのが作曲家ならば、演出家の仕事を担う音楽家や教育者も居るはずです。台本や脚本を読んで、どの役者にどのセリフを言わせるかとか、どんな表現をさせるかを考えるのが監督や演出家ですが、オーケストラでは指揮者がそれに当たるのかも知れません。作曲家は自分の思いの１０パーセントも楽譜で表現できないと嘆きます。その楽譜を忠実に再現してそれで良しとする演奏家も居ますが、多くの演奏家は自分の解釈を加えて楽譜の不足情報を補います。

最近私はニコライ・トカレフのピアノ演奏に触れてそのテクニックもさることながら、見事な「演奏解釈」と表現にすっかりファンになってしまいました。別の機会に聴いた一流の女流ピアニストのミスのない完璧な演奏を聴いた時、明朝体のフォントで演奏されているような印象を受けました。トカレフの演奏は「書」の世界に通じる音空間があり、音の配置やダイナミズムは生き生きとしていて楷書体のフォントでは味わえないものがあります。

そう思って私が今まで接してきた多くのピアニストの演奏を振り返ると、楷書体のドビッシーや丸ゴシック体のバッハやポップ体のモーツアルトという感じの演奏が多く、ショパンに至ってはフォントサイズが大きすぎたり変換ミスがあったりというものもありました。これは勿論抽象的な比喩ですが、それほどお行儀良く正確に丹念に練習された演奏に接しても、活字体のように無個性で無機質な演奏であったと言うことです。

手書きの文字が持つ「味」こそが、演奏家に求められる表現だと思うのですが・・・



前の図はピアノ演奏における「最低限度の表現」を示したものです。「堂々と」とか「大はしゃぎ」「しんみり」「軽快に」などの表現はこの座標上のどこかにあるわけで、この二次元のグラフと同じ操作をカラオケマシーンのテンポつまみやボリュームつまみで操作できますし、多くのＭＩＤＩシーケンシャルファイルを演奏できる装置のコントローラーはこれに対応しています。

それにもかかわらず実際に同じデータの曲をボリュームコントロールとテンポコントロールだけで色々な音楽的解釈を表現することはかなり無理があるように思います。

ピアノ曲の場合、「音符の持続時間」という第三のパラメータがフレーズ感やアゴーギグの表現にはどうしても不可欠です。

つまり台本を読むとき「声の大きさ」「テンポ」という要素以外に、「間」の取り方というもっと個性的な要素が必要になってくるのです。

多くのピアニストは正確に演奏しますがこの「間」の取り方に関して楽譜に書かれていないので配慮が不足します。間がうまくとれていないとまるで「寿限無」のようなフレーズになってしまいます。

トカレフの演奏ではすべてのモチーフがあたかも対話をしているように自然な「間」で出入りします。漫才における「ボケ」「ツッコミ」も間の問題と思うのですが、「間抜け」なセリフや演奏では白けます。

「はい」という言葉だけで始めから終わりまで電話に応対していたのを聞いたことがありますが、この「はい」を「は～い」や「ハイ！」と言うだけでもニュアンスが変わりますね？語尾を上げると「え？」という使い方にもなります。台本の「はい」をどんな「ハイ」にするかは、楽譜をどう解釈して表現するかと言うことと同じです。

電子キーボードのコントローラは相変わらず進歩がありません。フットコントローラの活用を大切に考えない指導者やピッチベンダーやポルタメントの有効な利用法を考慮しない指導者には無用かも知れませんがタッチセンス以外にもアタックコントローラーやその他のコントローラの必要性を感じて欲しいものです。棒読みの音楽にならないために。